

## 木幡城の盛り土

豊臣秀吉は京に築いた聚楽第を甥の秀次に譲り、自らの隠居屋敷として文禄元（1592）年に、宇治川畔の指月山<sup>しげつ</sup>で伏見城の造営に着手しました。しかし、1593年に秀吉は息子秀頼が誕生すると、秀次と不仲になり、1595年に秀次を切腹させます。そして、聚楽第を取り壊し、その殿舎を伏見城に移築し、隠居屋敷を大規模な城郭へと造り直します（指月伏見城）が、文禄5（1596）年の大地震によって倒壊してしまいます。翌日、秀吉は木幡山に伏見城を再建することを命じます（木幡伏見城）。

伏見にある桃山丘陵には天守を中心に、二の丸や三の丸といった郭が造られ、その周囲に大名屋敷が建ち並び、現在の市街地に城下町が建設されました。現在も松平筑前・板倉周防、治部小丸などの地名が残り、大名屋敷が建ち並んでいたことがうかがわれます。

京都府立桃山高等学校は毛利長門東町にあり、毛利氏の大名屋敷があったところとされています。平成5年に桃山高校の校舎の改築に際して、発掘調査を実施しました。



桃山高校の調査地

表土下、50～70cmの深さで建物跡や柵列、土坑などが見つかりました。調査対象地南半は、既設の校舎の基礎によって大きく攪乱<sup>かくらん</sup>を受けていました。その中の土層を見ると、建物跡などの遺構が見つかった面より

1 m下に大量の瓦が廃棄されていました。この中に金箔瓦がありますので、伏見城関連のものに間違いありません。最終的に、西に下る傾斜面に最大2 m程度の盛り土がなされているのを確認しました。

この調査地の西隣の調査地では、上層から掘られた土坑から大量の金箔瓦が出土しています。このことから、盛り土層を挟んで上下の遺構は、ともに伏見城関連のものと判断されました。下層の遺構は指月伏見城、上層の遺構は木幡伏見城の遺構と判断されます。

現在の桃山高校敷地の西側は、4 mの崖面が南北にあります。人工的なものだとわかりました。木幡山伏見城を築造するにあたり、丘陵を削り、土砂を盛り上げて建設に邁進した秀吉の並々ならぬ思いと、彼の絶大な権力の一端が偲べれます。（岩松 保）



上層で見つかった建物跡（木幡伏見城）



盛り土層の下で集められた瓦



指月伏見城段階の地形